

## 「私はワクチン、お母さんは定期検診」 ～子宮頸がん予防ワクチン、中1から高1の女子に公費助成～

男性、女性ともに、おおよそ2人に1人が一生のうちにがんと診断され、男性ではおおよそ4人に1人、女性ではおおよそ6人に1人ががんで死亡する時代になっています。そのためにがんの予防、早期発見・早期治療はとても大切なことです。最近、ワクチンと検診でほぼ完全に予防できる唯一のがんである子宮頸がんのことが話題になっています。さらには乳幼児の細菌性髄膜炎を予防するワクチン（ヒブワクチン、小児用肺炎球菌ワクチン）とあわせて、この子宮頸がん予防ワクチンの接種費用が公費助成されるようになったことも大きな話題になっています。

### \*子宮頸がんは20～30代の女性に急増中

子宮頸がんは、子宮の入り口付近にできるがんで、子宮の奥の赤ちゃんが育つところにできる子宮体がんとは区別されています（図）。

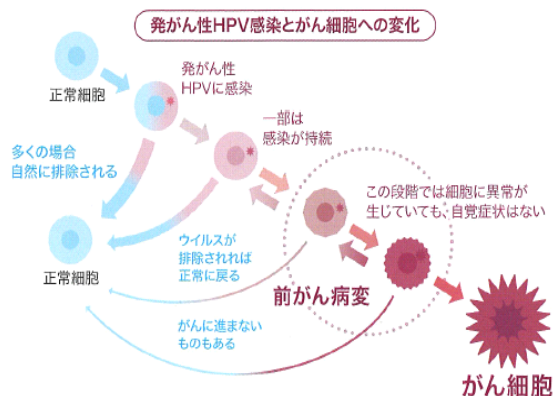


子宮頸がんは、女性特有のがんとして乳がんに次いで発症率が高く、最近では20代から30代の女性に大変な勢いで増えていると言われています。日本では年間約1万5000人が罹患し、約3500人の女性が亡くなっていると推定されています。厚生労働省人口動態統計によると宮崎県では平成20年の1年間に73人の女性が子宮頸がんを含む子宮のがんで命を失っており、女性の人口10万対の死亡率は12.1で47都道府県中ワースト2位でした。

### \*子宮頸がんの原因はウイルス

子宮頸がんの原因は、ヒトパピローマウイルス (human papillomavirus, HPV) の感染であることが明らかになりました。HPVには100種類以上の種類がありますが、日本人の子宮頸がんの原因になるおもな発がん性ウイルスは16・18型HPVです。この発

がん性ウイルスに日本人女性が、性行為によって一生のうち一度でもかかる危険性はほぼ80%、そのごく一部（約0.15%）が長期間を経て、「前がん病変」となり、さらに一部が「子宮頸がん」へ進行します（図：allwomen.jpより引用）。



### \*ワクチンは子宮頸がんをほぼ100%予防する

子宮頸がんを予防するワクチン（子宮頸がん予防ワクチン）の働きは、性行為によって起こる16型および18型HPVの感染を予防することです。このワクチンは接種開始から6年4ヶ月の時点で16型および18型HPVによる前がん状態をほぼ100%予防したと言われています。これ以上の長期の効果の継続期間は推測の域を出ませんが、少なくとも接種後20年はHPV感染を防ぐのに十分な免疫が維持されると専門家は考えています。

### \*ワクチンは10代の初交年齢前の接種が効果的

性行為によって起こる発がん性HPVの感染を防ぐことが、このワクチンを接種する目的です。そのために初交年齢前の11～14歳女子への接種が推奨されていますが、平成22年度、23年度に限って中学校1年生（13歳相当）から高校1年生（16歳相当）の女子に対して接種費用が公費助成されることになりました。次いで接種が推奨されるグループは15～45歳女性です。接種回数は、いずれのグループも0、1～2か月、6か月の3回です。

### **\* ワクチンと定期検診は両輪**

現行のワクチンだけでは、子宮頸がんを100%予防することはできませんので、ワクチン接種後も定期的な検診が必要です。国際がん研究機関は、検診受診率が85%、それにワクチン接種率85%が達成されたときに95%の子宮頸がんを予防できると試算しています。ちなみに宮崎県の子宮がん検診受診率は20%に届くか否かといったところ、20歳以降の定期検診の受診率の引き上げもきわめて大切なことです。

「私は、ワクチン。ママは、検診。」(<http://healthWalk.jp>) がさらに徹底して20年、30年後には日本から子宮頸がんは消えている、そんな期待がかかっています。ワクチンの日本での発売は2009年12月で、麻しん・風しん混合ワクチンやジフテリア・破傷風・百日咳混合ワクチンなどと異なり新しいワクチンです。接種か否か、接種年齢、接種費用の公費助成、副反応のことなど不明なことがありましたらかかりつけ医、または各市町村にお問い合わせください。

(健康推進部 浜田 恵亮)